

# 音 今 崎 町 黒

## 新聞からたどる黒崎の歴史 (五十七)

### 双葉山、羽黒山から大相撲大野巡業まで

昭和二十二年、大野の諏訪神社境内で大相撲興業が行われた。

(先月号からの続き)

中之口村誌「横綱羽黒山」伝より羽黒山についてのいくつかのエピソードを紹介する。

一、羽黒山が昭和九年、相撲道への志をたて、郷関を出て僅か七年のスピード出世で、昭和十六年、新潟県初めの横綱として郷里へ錦を飾ったのである。

一、幼くして父親を亡くし、母親の手一つで育てられた羽黒山にとって、母親は最大の心のよりどころであった。帰郷するとすぐに母親の霊前に横綱になった報告をした羽黒山の頬は涙に濡れていた。そしてすぐ汗を拭く暇もなく、衣服を改めて野路の一隅にある両親の墓前に向かった。羽黒山が暖かい人間性の人だったことは、前に新聞記事でも述べたが、実に親孝行で、また誰に対しても思いやりのある人だったことがわかる。

一、戦争中の昭和二十年、国技館が空襲で焼けたり、力士が大変だったことも前の双葉山の項で記したが、同じ頃の羽黒山の苦勞話をひろって見よう。昭和二十年の五月場所を最後に、当

人々は、あの興奮と羽黒山に寄せた村人の思慕の情は、いつまでも尽き果てることはないだろうと言っている。

### 羽黒山のプロフィール

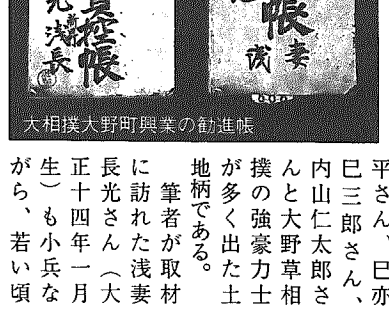
羽黒山政司(一九一四—一九六九)、三十六代横綱、新潟県西蒲原郡生まれで、本名小林正治、昭和九年(一九三四)五月立浪部屋から初土俵を踏み、序ノ口以来連続優勝して各段を一場所で昇進、六場所目に入幕するといふ快記録を持つ、昭和十五年(一九四〇)一月大関、昭和十六年(一九四二)五月場所後横綱に推挙された。在位十二年間三十場所の記録をつくり、昭和二十八年(一九五三)限りで引退し年寄立浪を襲名した。百七十八センチ、百二十八キロの筋肉質の巨体は力が強く優勝七回(全勝四回)を数える。理事、取締りを歴任し、没後従五位勲四等を贈られた。

大野にも来た大相撲 横綱双葉山や羽黒山の新潟巡

業のことを書きながら、ふと、筆者の脳裏に、ゆかた姿に下駄を履いて、のっしのっしと二之町を歩いている大きな力童山の姿が思い浮かんだ。それは戦後間もないころだったことしかわからないが、たしか、大野の諏訪神社境内で大相撲興業は行われている。そう思うと、この話をまとめたくなり、早速、大野の年配で相撲好きの人たちを訪ねて聞き取りの取材を始めた。すると、ほとんどの人が大相撲の大野へ来たことは覚えていたが、それは何年の何月、何日だったというところを正確に答えられる人は居なかった。これは、聞き取り取材だけでは、とても不可能とあきらめかけていたところ、或る相撲ファンから、新田町の浅妻長市さん(現当主浅妻長光さんの父)が勧進元となつて大相撲を連れてきたということを知ることができた。新田町というところ、昔から相撲ファンの多い所で、浅妻長四郎さん、伊藤忠平さん、巴亦巳三郎さん、内山仁太郎さんと大野草相撲の強豪力士が多く出た土地柄である。

筆者が取材に訪れた浅妻長光さん(大正十四年一月生)も小兵ながら、若い頃

相撲で鳴らした人であった。取材の目的を話したら、「たしか、家の親父が勧進元をした当時の帳面が残っているはず」と、探してもらったら、お仏壇の中から出てきたのが、昭和二十二年八月一日、二日の「双葉山組合一行興業経費控帳」と「双葉山組合興業坪席控帳」と書かれた二冊の大相撲大野町興業の勧進帳である。聞き取りだけでは年月もはっきりせず、いかげんなことは書けないしと思っていたので、この勧進帳を見た時の嬉しさはひとしおであった。



勧進帳には、勧進元浅妻長市さんの外にこの興業の世話方として協力した、かつて大野草相撲の名行司だった箱田四郎平さんと、元料亭姥ヶ山の白井定一さんの名が載っている。達筆で書かれたこの勧進帳は、相撲文字のうまかつたと伝えられる箱田四郎平さんの字で、箱四さん独特の筆法で書かれていて面白い。

そして、昔から(戦後)大野に大相撲が二回来たという言い伝えがあったが、この勧進帳によつて一回目の興業は、昭和二十二年に行われたことがわかった。ただ、勧進帳の表書きにある「双葉山組合一行」というのがわからない。もう一つわからないのは、この勧進帳には大野へ来た力士の名が何も記されていないことである。(続く)